

## 金井美恵子の短編集における少女ファタール

シャラリン・オルバー

金井美恵子が作家としてその初期、1970年から1975年までに創作した多数の短編小説には、幾つかの非日常的なテーマが表されている。これらのテーマには、暴力的な死や傷害、身体切断、近親相姦、売春、マソキズムなどの性の超越性が示されている。これらのテーマを探究した作家は、金井のみではなかったことを強調したい。1960年代から80年代の間に、河野多恵子、倉橋由美子、高橋たかこ、大庭みなこ、森茉莉といった多くの日本の女性作家がこのような不穏な要素を含んだ作品を生み出した。私は、論文“The Body in Contemporary Japanese Women's Fiction” (1996) において、金井の小説は「父権社会に挑戦する作品」であると論じた。この論文では、金井の小説がどのような観点において「父権社会の挑戦」と解釈できるかについて分析する。

まず、金井の「母子像」(初版1972)における分析を大まかに要約した後、主に「うさぎ」(初版1972)に焦点をあてて論じようと思う。これらの小説において金井は父と娘の関係にみる心理分析、そしてその関係が娘の主体性に与える影響を探究したと解釈できる。金井は、父権社会に挑戦する作品を創作する過程で、「Femme Fatale」の概念をうまく利用している。「Femme Fatale」の文字どりの意味は「殺害する女」である。伝統的な「Femme Fatale」の表象は、男性が拒むことができないような、美しく、性的魅力と欲望に満ちた、神秘的な要素を持つ女性である。「Femme Fatale」はいわゆる女性の本質的な魅力を強調した人物として定義されるが、その魅力は繊細さよりも、むしろ強靱な精神力を結び付けられる。「Femme Fatale」の典型的な例として、1930年代に活躍した女優マーレーナ・デートリッチを思い浮かべてもらいたい。「Femme Fatale」は、彼女を愛した男の死や墮落を引き起こすことによってその称号に恥じない行動をする。しかしながら、多くの場合、そのような行動は彼女自身が意識的に引き起こすものであるとは言い難い。むしろ、「Femme Fatale」のナラティブにおいて、悲劇的な結末は彼女の圧倒的な美がもたらした、嫉妬、疑惑、肉欲などの複雑に絡み合った男の感情ゆえに引き起こされる。

このような一般的に定義された「Femme Fatale」観を考察すると、金井の小説において、主人公の少女たちを「Femme Fatale」として分析することは、一見、困難に見受けられる。しかしながら、「母子像」、「うさぎ」を分析する過程で、いかに主人公の少女たちが「Femme Fatale」としての役割を果たしているのかを明らかにしていきたい。

金井の「母子像」は主人公である少女とその父親の関係を軸に展開する物語りである。美しく、魅力的な少女は、ただ父親の愛だけを欲するが、父親はそれに気づかないふりをする。しかし、彼女はあらゆる会話、あらゆる瞬間において「彼らの間で、甘く危険な痛みがびんと張って今にも破裂しそうな風船のように、ふくらむことを知っていた。」(金井 1992) 娘と父親の転機は交通事故によって訪れる。娘は片足をなくし、顔に大きく醜い傷痕をおり、父親は記憶をなくす。その後、父と娘は彼らが親子であることを知る者がいない、新しい土地へ移り、恋人同士のような生活をおくった。父と娘の物語は、父親が娘を「おかあさん」と呼ぶ場面で終わっている。

この物語は娘の近親相姦的願望と、その禁止として表象される父親の物語であると解釈できる。主人公の少女は自分の父親を愛するが、父親は近親相姦の枠組みから逸脱することを自身に禁じており、娘への愛を実現化することはなかった。少女はその禁制が解かれるのをひたすら待っている。その一方で、彼女の主体性の軸となるものは、まさに父親への欲望とその不可能性との間の緊張状態にある。父親の記憶喪失により、禁制が解かれその緊張が緩和する時、彼女は自分の名を失い、ついには、父親に対して母、恋人、娘、の役割を同時に演じることににおいて、娘としての主体の安定性までも失う。また、安定した主体性の喪失が身体の統合性の喪失によって引き起こされると言うことは重要である。彼女は左足と美を失ったことで、自分に課した永遠の処女性という呪縛から解放されるのである。ここにおいて、処女性はもはや何の意味ももたなくなる。

もちろん、記憶喪失以前にも父親は娘の愛を否定してはいなかった。父親が禁じたものは、娘との肉体関係である。それは、欲望する精神ではなく、肉体そのものが破戒的行為の要因となり得るからである。法と発話による力

を通じて、禁止を実行するのは、父親である。その一方で、禁じられるのは女性の肉体、そして彼女の美によってかき立てられる行為そのものである。禁制が解かれるためには、父親の記憶（法）と声を失い、娘もその美を破壊してしまう必要がある。禁制という言説が父親と娘両方の主体性の基礎を形成していることにおいて、父と娘は、禁制が解かれる時、共に主体と名を失うのである。

しかしながら、父親が「おかあさん」と発した時点で、娘は再び父親が彼女に課した役割を演じなければならなくなる。これは、依然として娘が「父の名における法」に従って生きなければならないことを示している。彼女は父親に服従し、父親が望むがままのものになり続けるのである。

さて、次に「うさぎ」を詳細に分析したい。金井の初期の小説に多く見られるように、このメタフィクション的作品には、第一次物語の語り手と、メタ物語世界の語り手が存在する。これ以後この論文では第一次物語の語り手を外在的語り手、メタ物語世界の語り手を内在的語り手と称する。「うさぎ」において、外在的語り手と、内在的語り手は共に女性である。外在的語り手は物語の作者として登場し、自身を言葉と自己表現の観点から定義するところから物語は始まる。

書くということは、書かないということも含めて、書くということである以上、もう逃れようもなく、書くことは私の運命なのかもしれない。と、日記に記した日、私は新しい家の近くを散歩するために、半ば義務的に外出の仕たくをした。（金井 1992）

外在的語り手は、散歩の途中で雑木林の中に迷い込んでしまい、人間と同じ大きさの白いうさぎが走るという不思議な光景に出くわす。彼女はそのうさぎを追いかけ、不思議の国のアリスのように、穴の中に落ちてしまう。彼女が目覚めた時、その大きなうさぎがそばに座って自分を見ているのに気がつく。そして、この外在的語り手は、そのうさぎが実際には、うさぎの皮を縫い合わせた毛皮をまとい、桃色のガラスのレンズをつけた若い女性であることに気がつく。そのうさぎの姿をした女性のメタ的物語は次のように始まる。

「あたしがこんなふうになったことについては、それなりの理由があるのだろうと、自分でもずい分、考えたのです。でも、結局のところ、よくわかりませんでした。こういうことになる最初の出来事は、多分、あの朝にはじまったんだと思いますけれど」  
そうやって、彼女は、ゆっくりと、記憶をたぐるように話しはじめた。  
（金井 1992）

彼女は、外在的語り手に、「あの朝」目を覚ますと、母親と兄姉が突然消えてしまったと語る。つまり、彼女と父親のみが家に残されたことになる。

家族がいなくなる前でさえ、彼女と父親の関係は官能的な雰囲気をかもしだしていた。

飽食と睡眠を好む赤ら顔の豚、と家族は父親のことを考えていたのです。でも、あたしは別でした。この飽食と睡眠の甘美な快樂に息を切らせ、太った腹を波打たせている父親が一番好きだったのです。夕食の時などは、時々あたしは父親につきあって、他の家族は決して口にしようとならない料理を、お腹がいっぱいでもう眼を開けているのが精一杯というところまで食べたりしました。お互いに無遠慮にげつぷをもらしたりして、お腹がいっぱいで食べられなくなると、ローマの貴族のように咽喉に指をつっ込むという野蛮な方法ではなく、特別の薬草で作った下剤を飲ん

で、すっきりさせて、また食べはじめたのものです。(金井 1992)

父親と彼女の好物はうさぎだった。毎月1日と15日、父親は飼っているうさぎのなかから、太ったうさぎを選び、その首をナイフで切って血抜きをするのだった。娘はしばしば寝室の窓からこの光景を喜んで見ていた。朝食の後、父親は血抜きをしたうさぎの皮を剥ぎ、うさぎ料理を作るのを習慣とした。父親の料理したうさぎを食べるのは父親と娘だけで、他の家族はその料理を気味悪く思い、手を付けることはなかった。

母親と兄姉が姿を消したのは、その月の15日、つまり、父親と娘がうさぎ料理を楽しむ日であった。彼女は自分と父親が二人だけになれるのを長い間待っていたと言っている。父親もまた、彼女にすぐに学校をやめるように言った。それから、父親と娘は毎日豪勢な料理を食べ、これ以上ないほどの幸福な生活を送っていた。しかし、退廃的で、不健康な生活が原因で、父親は肥満になり心臓発作をおこし寝たきりになってしまった。従って、うさぎを殺し、料理するのは娘の役目となった。

最初はとてもしやだったのですが、すぐにあたしは、殺すことも楽しみの一つだってことを理解できるようになったのです。まだあたたかい兎のお腹に手を入れて、内臓をつかみ出す時は幸福でした。肉の薔薇の中に手をつっ込んでいるみたいで、あたしはうっとりして我を忘れるほどでした。指先に、まだピクピク動いている小さな心臓の鼓動が伝わったりする時、あたしの内臓も激しく鼓動しました。もちろん、兎を抱いて首を絞める時にも、内臓に手をつっ込むのとは違った快樂がありました。首を絞める時の快樂をもっと強烈に高めるために、あたしはいろいろな方法を試してみたものです。兎は耳をつかんでいるととてもおとなしいし、あのやわらかでまっ白なくくり太った生き物を自分の手で殺すのは、とても残酷なことのように思われたのですが、だんだんそれが甘美な陶酔に充ちた快樂に変わって行くのが、はっきりわかりました。手の力を少しずつ強めて行くと、兎は苦しがつて脚を蹴るものだから、それがあたしのお腹にあたり、とても興奮しました。(金井 1992)

娘はこのような経験から性的興奮を得ていたことを話す。彼女は全裸になり、太股の間に、もがくうさぎを挟み込む方法でうさぎを殺すようになった。さらに、彼女はただ快樂を得るためにうさぎを毎日殺し始めた。

彼女とうさぎとの一体化は、ついに、うさぎの毛皮をまとい、うさぎと同じ動きをするまでに至った。このことに非常に満足をおぼえた彼女は父親を喜ばせようと、父親の誕生日に、「私を詰め物料理にして食べてください」と書いたプラカードを持ち、父親の寝室に飛び込んだ。彼女の計画では、父親の驚きはすぐに笑いに変わり、彼女をうさぎに見立て、うさぎを絞め殺す儀式を行うはずであった。その間に、

父が首に手をかけ絞める真似をすると、少しあばれ、最後には全身を激しく痙攣させ、やがてピンと硬直して、ぐったりと死んだ真似をします。それから、いよいよ皮剥ぎの儀式です。毛皮を脱いだ時、さも皮を剥がれた兎らしく見えるように、血をたっぷり全身に浴びておきました。あたしの内臓が父の手でさぐられる時のことを考えてドキドキしていたのです。(金井 1992)

しかしながら、父親は彼女の思惑に反し、巨大なうさぎが飛び込んできたと思い、心臓発作を起こしてしまうのだった。父親は死ぬ直前、うさぎの姿をした娘に物を投げつけ、片方の目を潰された娘は気を失ってしまう。意識を取り戻した時、彼女は自分が父親を殺してしまったことに気がつく。

彼女は外在的語り手に、その後も徹底してうさぎとしてふるまい、二度と人間の世界に戻れなくなったと語る。ここで、娘の内在的語り手としてのメタ物語は終わり、再びナラティブは作者である外在的語り手によって進んでいく。外在的語り手はずっと後になって、再びその娘に出会ったことについて語る。外在的語り手はその後いくら探してもみつからなかった娘の家を偶然みつけたのである。さらに家の中で、語り手は娘がうさぎの姿で床にたおれ、その右目には桃色のガラスの破片が突き刺さっているのを見つけた。そして物語は語り手が娘の体からうさぎの毛皮を剥ぎ取り、自分自身はその毛皮を身にまとい床にうずくまるところで終わっている。

この作品「うさぎ」には、主人公である娘が「男性」、「女性」両方の特権的な権力を楽しんでいるということが示されている。一般的には、男は殺す性、女は殺さない、または殺される性と結び付けられる。または、男は食べる性、女は食べない性(あるいは食べられる性)と比喩的に定義される。これらのことは、男が性に関してイニシアティブをとり、女が受け身としてそれを受け入れるという結論を導き出す。

しかし、この小説では、内在的語り手である娘は、うさぎとの同一化においては殺されるものとして、父親殺しという事実においては、殺すものとして、同時に表象されている。つまり、彼女は殺すという行為と殺されるという行為の両方において快楽を味わうことになる。そして、結果として彼女は文字どおり自分自身をも殺害してしまう。

娘は自分とうさぎを同一化することによって自分自身を食べられる存在とし、そのことに快楽をおぼえている。彼女の父親との性的な関係は明らかである。彼女は本質的に「男性」の行為と定義される殺害と肉食の快楽を父親と共にすると同時に、父親の肉体的快楽の受け身的対象になるという「女性的」役割をつとめることをも欲している。彼女の欲望の障害となる母親の存在が消えてしまうと、娘がすべきことは、父親に対する自分の欲望をうまく隠すことのみである。男にとって自分の娘と性的関係を持つことは禁止されているが、動物を殺し、その体を食することは許された行為である。従って、もし、娘がうさぎとして存在するならば、父親が彼女を切り裂き性的関係を持つことは容認されるのである。

しかし、不運にも、父親はうさぎの姿をした娘を権力構造の悪夢的な逆転として認識し、うさぎたちが復讐にやってきたと信じた。娘が自分から学んだジェンダーに基づいた権力構造への絶対的従順を示しているとは認識できなかったのである。

ここで、私はこの二つの小説の主人公である少女が「Femme Fatale」の特徴に合致する点をあげたい。欧米映画における「Femme Fatale」の研究者、マリー・アン・ドーンによると、「Femme Fatale」というペルソナは次のような特質を含んでいる。ドーンはこう書いている。

(引用: Mary Ann Doane. 1991. *Femmes Fatales: Feminism, Film Theory, Psychoanalysis*. New York and London: Routledge.)

1) 「Femme Fatale」は、母性に対比するものとして表象される。生産(という言説)をフェティッシュ化する社会構造において、妊娠という観念から逸脱するFemme Fataleは何の生産性をもたないとして定義される。(Doane 1991, p. 2)

現代の日本において、最も生産性が無い、母性と相反していると論じられるのは「少女」である。この論文で紹介した二つの小説において、「少女」はまた別の観点からも母性と対照化していると解釈できる。少女と母親は、父親をめぐってのライバルとして描写されている。どちらの作品においても、母親は、愛する父親と二人つきりになりたいという少女の願望に答えるかのように、姿を消している。

2) 次にドーンは「Femme Fatale」の力は無意識に行使されるものだと述べている。「Femme Fatale」の力は彼女の意識や精神の次元からあらわれるのではなく、その肉体と美から(無意識に)引き出されるものである。この点において、「Femme Fatale」は男性が恐れる「制御不可能な願望」と密接にかかわりを持つと言える。男性の恐怖感、自身の精神的な強さを信じているにも関わらず、その一方で、抗い難い「Femme Fatale」の誘惑に屈服し、自身の制御力を失うのではないかという恐れである。(ibid., p. 2-3)

この二つの小説において、少女たちが意識的に父親に対して害を及ぼしているのではないことは明白である。む

しる逆に、少女たちは、ただ、父親の欲望の対象になることだけを切に願っているのである。しかし、典型的な「Femme Fatale」像が示すように、完璧な女性になろうとする、または処女で従順な女性的な娘になろうとする、彼女たちの試みは結果として悲劇につながる複雑な感情を引き起こすのである。また、父親が制御力の表象として描かれているということも明確である。つまり、父親が少女の生きる世界を定義し、コントロールしていると解釈できる。しかし、たとえ父親が意識的には娘を欲望の対象として認識しないとしても、少女は制御力の崩壊として表象され、「父の名における法」が合理化したあらゆるものを転覆させる。

3) さらに、ドーンは、「Femme Fatale」が「マスカレード(仮装)」として作用しているという点に注目している。つまり、女性は男が従順で女性らしい女に与える報酬を得るために、女性らしさを「演じる」ということである。しかし、この点についてドーンは、次のような説明を加えている。「女性らしさは、男性らしさを自分のものにする企みを隠蔽するための仮装であり、または父親の悪意が自分に向くのを防ぎ、父親を懐柔するために図られるごまかしとして作用するだけである。また、男性らしさは彼女の所有するものではない。つまり、彼女が権力的立場からものを言ったとしたら、それは、一種の男性らしさの横領という形であられる。」(ibid., 34)

これら二つの作品、特に「うさぎ」において、主人公の少女は明らかに男性らしさに連結する権力を「盗もう」あるいは「模倣」しようとしている。皮肉なことに、この行為は、父親の欲求に完全に従うかたちで行われる。いずれの場合も父親は、娘の徹底した従順なる行為が、結果として自分の死（あるいは、記憶喪失によって表された比喩的な死）を招くことに、それが手後れになるまで気づかない。たとえ表面上は、娘が父親の願望に従順な受け身の対象として表象されているように見受けられても、同時に彼女たちは、父親から男性的な特権を享受する方法も学んだと言える。「母子像」では「いいえ」という権利、「うさぎ」では殺害と肉食における快楽がそれにあたる。いずれの作品においても、少女は、性における主体性と言う一般的に男性の特権と定義されているものを手にいれようと試みている。「母子像」では、この試みは一見成功しているようであるが、その成功は父親と娘の主体性（アイデンティティ）の犠牲にもとづいたものである。一方で、「うさぎ」では、この試みは父親の殺害、そして娘の死を引き起こした。また、外在的語り手は作者と言う男性特権的役割を奪い取ろうと試みながらも、結局は、娘同様に、退廃的な死の館でうさぎの毛皮の中にうもれてしまった。読者はそのようなナラティブの結末について不思議に思わずにはいられないだろう。

結論として、金井美恵子は現代の父と娘の関係における心理分析を描写するために、意図的に「Femme Fatale」ではなく、「少女Fatale」的な主人公を創造したと解釈可能である。この論文であげた二つの作品は、多くの点で典型的なオイディプス的娘と父親の関係を表している。要約すると、母親が「敗北」し、娘が自分の愛を完全に父親に伝えるということである。フロイドによると、このような関係は女の子が「正常」な状態で性的な成長を遂げるために必要な過程である。しかし、このような父と娘の関係は、これらの小説において悲劇的な結末をもたらす。金井は、現代における核家族の深層心理が創り出した、理想的、規範的な女性らしさの中には何か本質的に危険なものが存在するということを示しているように思われる。最後に、この金井の小説における主題は、女性（そして男性）を圧迫してきた、抑圧的な性的構造を脱構築する第一歩であるということ強調したい。そしてそれゆえに、金井美恵子の作品は「父権社会に挑戦する言説」の例として解釈されるべきである。

## おわりに

この論文の翻訳と校正において、惜しみない援助をしてくれた、ブリティッシュ・コロンビア大学、アジア研究科大学院生の長池一美さん、吉田香織さんに深く感謝したい。

## 参考文献

Orbaugh, Sharalyn. 1996. "The Body in Contemporary Japanese Women's Fiction." In Schalow, G. P. & Walker, A. J. (eds.) *The Women's Hand: Gender and Theory in Japanese Women's Writing*. Stanford: Stanford University Press.

金井美恵子 (1992) 「金井美恵子全短篇 1」日本文芸社。